

我意、偶像崇拜、肉欲、この世への愛などに人間を落とし入れることである。そして、人を滅びへと導くことである。このように、ウェスレーは天国と地獄の両方の存在を信じ、悪魔の支配下にある人は地獄に導かれると考えた。だからキリストによって新生しなければ「彼は必然的に滅びなければならない」(同、六八頁他)。キリストから新生するとは、悪魔の支配から出てキリストの支配に入ることであり、そうしない者は悪魔によって地獄に入るといのである。地獄に入る「もつとも普通な原因は、何らかの種類の罪である」(同、七八頁)。それは「われわれの心を盲目にし暗くする」(同、八三頁)。人間は、「悪しきこの世に、邪悪な・捕え難い・意地悪の霊たちの間に住んでおり、あらゆる悪を行ないかねない心をもっているからである」(同、九九頁)。しかし、「信仰と言う基礎の上に希望は立つて」(同、一一八頁)この世の悪魔と戦うことができる。ウェスレーによれば、この世は悪魔の支配と神の支配のせめぎあう場所であり、その中でウェスレーの説教は、悪魔の支配から民衆を救う力を持っていた。それゆえ救いを求める民衆に受け入れられ、歓迎されたのではないかと思う。

カントの人間観と最高善

南 翔 一 朗

『実践理性批判』第一部第二篇「純粹実践理性の弁証論」において、カントは第一篇「純粹実践理性の分析論」までは否定

的に扱ってきた幸福を自己の哲学的思惟のうちに取り込み、「最高善」の名の下に道徳性と幸福の一致を主張するのであるが、本発表の目的はこの分析論と弁証論における共通点と差異を考察することで、カントが何を基盤として道徳性と幸福の一致を主張するのかを明らかにすることであった。

カントは、弁証論の冒頭で「理性的有限的存在者」にとつての最高善においては、徳と徳にふさわしい幸福が総合的に、すなわち因果律によつて結びつかねばならないと主張する。こうして、徳と幸福の関係性は原因と結果の関係性として理解されねばならないとされるのであるが、カントによると、徳を生み出す道徳法則と幸福を生み出す自然法則はまったく異質な原理であるため、このような徳と幸福の因果的結合がおのずと生ずると安易に考えることはできない。こうして人間の実践理性はアンチノミーに陥るのであるが、カントによるとこのようなアンチノミーは批判的に解消される。すなわち、感性界に属しながらも道徳法則という叡智界の原理を保持する人間は、英知的なものである徳が原因となつて感性界における幸福が、間接的に(自然の知性的な創造者を介して)結果すると考えることができるのである。

以上のことからわかるように、カントは「理性的有限的存在者」としての人間の視点から徳と幸福の結合の必要性を主張し、さらにアンチノミーに陥つた徳と幸福の因果的結合を、道徳的存在者としての人間をよりどころにしつつ二世界論を導入することで解消する。このように、カントは弁証論において人間の視点から可能な最高の善を問題にしており、最高善の考察

においては人間が主体的な役割を演じているのである。

これに対して、分析論における人間の位置づけはやや異なっている。分析論においてカントは神と人間のそれぞれが道徳法則とどのような関係を持つのかを論じている。感性的であるがゆえに有限であり、主観的な願望を持つことで道徳法則に反しうる人間にとって、道徳法則は強制として命法という形式で現れる。これに対して、無限的存在者である神にとっては道徳法則は命法とはならない。なぜなら、神は道徳法則のみをすでに必然的に意志しており、すでに欲している事柄を強制されることはできないからである。このように、分析論においてカントは道徳法則との関係において人間と神を偏りなく扱う。そしてその場合、道徳の主体は理性的存在者一般であり、人間は理性的存在者の一ケースにすぎないのである。

このように、分析論と弁証論の間には議論の展開における人間の位置づけ・役割に関して大きな差異がある。分析論において人間は理性的存在者の一ケースにとどまり、道徳の主体は理性的存在者全般であった。しかし、弁証論において最高善を欲する主体はただ人間のみであり、人間のみ視点から議論が展開されるのである。すなわち、最高善の議論は考察の対象を人間に限定することによって始まるのである。弁証論における幸福の主題化とは理性的有限的存在者としての人間の主題化に他ならないのである。

本発表ではカントにおける幸福の主題化を人間の主題化として論じたに過ぎないが、この最高善を通して魂の不死・神の現存在が要請され、カントの宗教哲学が具体的な形をとり始める

ため、最高善を欲するということを意味する。それゆえ、カントの宗教哲学の方法を明らかにするためにも、最高善における幸福の主題化の根拠の明確化は重要な意義を持つと思われる。

フィヒテ宗教論の展開とシェリング

諸岡道比古

感性界と超感性界とを、カントは『判断力批判』において合目的性という概念において統一しようと試みた。しかしフィヒテもシェリングも、一つの原理からその統一を導出できていない、とカントを批判する。例えば、理論哲学と実践哲学を結びつけるものである全哲学の基礎を論じていない、とフィヒテは『全知識学への第二序論』で述べ、シェリングは『全知識学の基礎』に刺激を受けて書き上げた『哲学原理としての自我について』において、批判哲学の諸成果を一切の知の究極的原理に還元して叙述する、としている。フィヒテもシェリングもともに同じ意図から自らの哲学を形成し始め、ともに絶対的的自我によってその統一を図ろうとする。

両者の始まりは絶対的的自我であったが、次第にその内容の齟齬が出てくる。シェリングは『近世哲学史』において、フィヒテは絶対的自我を「人間的な自我としてのみ把握している」とし、また『啓示の哲学』において、フィヒテが彼の通俗哲学書『浄福な生への指教』などで唯一実在的なものである絶対者を、